関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

『魔笛第2部』と死

その他のタイトル	?Der Zauberflote Zweiter Teil“ und der Tod
著者	藤澤 ゆうり
雑誌名	独逸文学
巻	42
ページ	255-271
発行年	1998-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018191

『魔笛第2部』と死

藤　澤　ゆうり

18世紀後半のドイツ社会には，啓蒙主義の所産である合理主義，理性主義とともに，それらが否定した啓示的信仰に代わるもの，合理的認識が取りこぼした，非合理で神秘的なものとが矛盾を孕みつつ共存していた．この時代はまた，ドイツでは秘密結社の時代でもあった．ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe)もフリーメーソンのメンバーであったことは，表層的にでも秘密結社を語る上で必ず引き合いに出される．その場合には決まってと言ってよいほど，ゲーテと秘密結社の思想的親近性について，『マイスター』の塔の結社において「善き人間の完成」という理念に理想化されていると結論づけられる．秘密結社，フリーメーソン思想の傑作には，ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(Wolfgang Amadeus Mozart)の『魔笛』(*Zauberflöte*) がある．ゲーテもこれに触発されてその続編の執筆を試み失敗した．ゲーテの『魔笛第2部』(*Der Zauberflöte Zweiter Teil*)は上演されることのなかった未完成の「断片」であって，モーツァルトの音楽を伴ったオペラ『魔笛』とは比べるべくもないのだが，ゲーテがさらに発展させられると考えた『魔笛』の「高い意味」と，ゲーテの『魔笛』への愛着には，興味尽きせぬものがある．

1

現在，『魔笛』はドイツ語圏の劇場で史上最多の上演回数を持つオペラであるという．当時のヴァイマールでも，ミュンヘン版ゲーテ全集の注釈によれば，ゲーテが宮廷劇場の指導的地位にあった1791年から1817年の間に『コシ・ファン・トゥッテ』(*Cosi fan tutte*)，『ティートゥス』(*Titus*)，『フィガロの結婚』(*Figaros Hochzeit*)が数回，『ドン・ジョ

バンニ』(*Don Giovanni*)は6回,『後宮からの逃走』(*Die Entführung aus dem Serail*) 49回，そして『魔笛』は82回ヴァイマールの舞台で上演されており，モーツァルトのオペラは，重要なレパートリーであった[1].

『魔笛とウィーン』は次のように述べている．ヨーゼフ2世(Joseph II)の統治のもと，啓蒙主義と検閲の自由化の中で氾濫していた評論的な芝居，「舞台の上で理性を振りかざす」芝居にうんざりしていたドイツの観客達にとって，音楽を伴った「魔術もの」が魅力を持ち始めていた．ヴィーデン，アン・デア・ヴィーンに始まってプラハ，ベルリンなど各地で成功を収めていた，ジングシュピール『魔笛』の，1794年1月16日ヴァイマールでのクリスティアン・アウグスト・ヴルピウス (Christian August Vulpius) の改作による台本を使った最初の上演をゲーテは演出する．以後ドイツでは数十年間『魔笛』はヴルピウス版で上演された．劇場監督のゲーテがそれに同調していたのは驚くべきであるが，ヴルピウスの平板なえせ論理と，あらゆる幻想的なものへの反感は，ゲーテもその立場にいた当時の傾向が，反ロマン主義であったこともあり，時代の風潮と相呼応していた[2].

ミュンヘン版注釈は，フリーメーソンのエートスがゲーテの心に訴え創造の高まりの根本的確信に一致したのだと説明している．人間の善性，徳性の勝利を謳いあげる，擬古典主義的で新フマニスト的なエートスに動機づけられた試みだという[3].

ゲーテが遺した第2部のシェーマには俳優の配役や，装置，小道具のためと思われるスタッフまで構想されており，上演への意欲は充分に感じられる．しかし，シュタイガー(Emil Staiger)は『ゲーテとモーツァルト』の中で，これを「夭折した命を引き止めようとするのか，あるいは輝いていた残像を留めようとするのか」と，この最高位の音楽を舞台に再現できる作曲家がいないことを認めたうえでの企てであり，これはシラー(Friedrich von Schiller)の死後に，デメートリウスの完成を自分に迫ったその考えと似たものだ，というのだが[4].

完成及び上演を断念するに至ったいくつかの経緯は，ミュンヒェン版の解説などで説明されている．先んじてシカネーダーが続作を作曲家ペーター・ヴィンター (Peter Winter) と組んで発表した，モーツァルト

に代わる作曲家を見つけられなかった，など，専ら興行上・音楽上の要因で説明されてきた．1798年5月初めに，演劇人イフラント（August Wilhelm Iffland）に完成を要請されて，「非常に多くのことが起こったので，この仕事を放っておくのも愚かなことかと思う」(1798.5.9)[5]と，再び意欲を見せるゲーテに早くも2日後の5月11日，引導を渡したのは『ファウスト』執筆に集中するようにと言った，シラーであった[6]．

2

モーツァルトの「魔笛」においては，よく知られていることだが，18世紀ヨーロッパのフリーメーソンの思想と，そのロッジで行なわれる通過儀礼などの行動様式が，テクストにも音型にも表現されている．夜の女王の3人の侍女（三つの欠点「無知」「野望」「狂信」），パミーナ救出の「旅」，教団が派遣する3人の童子（三つの美徳「信仰」「希望」「慈愛」または「力」「智」「美」）による指導，ザラストロのいる神聖な森―神殿の領域．森の三つの神殿「叡知の神殿」「理性の神殿」「自然の神殿」，メルヒェンにはよく用いられる，フリーメーソン好みの神秘の Triade[7]，オシリスとイシス神，ヒエログリフ，ピラミッドなど，様々なエジプト的・秘教的な舞台装置．

タミーノと教団の第一弁者（der erste Sprecher ＜ Priester ＞ des Ordens）と参入志願者の間で交わされる「問答」．

「この神聖なる殿堂の中に何を求めるのだ」
「愛と徳が持っているもの」（I -15 BA4553a）

教団の指導者ザラストロによる，志願者タミーノの「徳性」と「参加資格のある20歳であること」を教団の僧達の前での宣言，実際にロッジでは儀式化されて行なわれる「沈黙」「水」「火」の「試練」，儀式に向かう参入志願者が着ける目隠し，「遍歴」とはロッジの中を志願者が移動すること，その宣言が行なわれる「北の門」は，参入志願者が立つロッジの北の位置であり，ことごとくがフリーメーソン参入儀式に基づいて構成されている．

そして，タミーノによる人間形成（Bildung）の完成理念は，次の箇所に表される．

徳性と正義が／大道を正義で覆うとき，
その時，この世は天国となり，
死すべき人間も神々に等しいものになる．（I -19 Ibid.）

強いものが勝ち
報いとして／美と叡知には
永遠の王冠がかざられる！（II-30 Ibid.）

ここで歌われるように，ロッジへの参入と試練の目標は「神の姿に等しい」人間の完成に向けた，人間性の陶冶である．

『魔笛』の原典となった，『ジンニスタン』（*Dschinnistan*）の中の『賢い子供』（*Die klugen Knaben*），『賢者の石』（*Der Stein der Weisen*），『ルル　魔法の笛』（*Lulu oder die Zauberflöte*）などシカネーダー（Emanuel Schikaneder）はここから好んで題材を取っているのだが，その編者ヴィーラント（Christoph Martin Wieland），後にやはりロッジ「アマーリア」のメンバーで，啓蒙的メーソン，が1812年ロッジの講演で「その悟性が人為的にまたは知識によって発展させられていない自然児，即ち一種の開化されていない暗愚な感覚を持っている人間…と死」[8]という表現をしている．ここに見られるように，「ドイツ啓蒙運動の副産物であって，人間の自己の知力の働きによって，人間と外界を改革すべき基盤となるもの」がロッジ参入の理念であった．『魔笛』の台本の完成に真に寄与したのが，モーツァルト・シカネーダーの両者のうち，どちらなのかという問題の結論はまだ出ていないという．音楽に比較して，作品の内容も台本も拙劣だとする評に対して，ゲーテはシカネーダーを擁護していたが，音楽を伴わない部分の軽視が上演回数を重ねる度に強まり，象徴の意味が時代を経るうちに失われ，エジプト秘教的な仕掛けが消されることさえある，抽象化されてしまったのが，現在のオペラ『魔笛』である．秘教的な仕掛けは，しかし，ゲーテにとっては，単にエキゾテ

ィックな趣味で観客を喜ばせる舞台装置ではなかった.

『魔笛』の中に，死の表象がいくつも現れる．Tod, tödlich, Stirb!, Rache などの言葉とパミーナの自殺の試み，パパゲーノの孤独からの死への願い，元素による試練の「死の暗い谷」「死の恐怖を克服するとき，彼は大地の中から天に向かって舞い上がる」というこの死は，生物的な死ではなく，ロッジにおいて執り行われる儀式の死，ロッジへの参入を意味する「人間の完成」への通過儀礼としての死であり，儀礼の中で象徴化された積極的な歓迎すべき死である．この通過儀礼というのは，ただしカトリシズムと言うまでもなく，キリスト教社会で一般に受け入れられている洗礼や聖体拝領による「再生」の概念，即ち現世の肉体を持ったままで霊的に再生するという意味がその底流にはある．完全な生のための過程としての「死」である．むろん，人間の内部への神の獲得というテーマは，フリーメーソンや秘密結社に特有のものではなく，過去の教条的な啓示的宗教によっては，すでに説明不可能になっていた18世紀のものであった.

昼と夜の世界，自然の世界と崇高な世界の対立が理性によって調和し，作品の理念である人間の中への神，神性の獲得が成就する．結社での通過儀礼を経ることで人間性の陶冶が完成し，小さな神，小宇宙である自分を認識することで獲得できるとする『魔笛』には，人間の理性に対する楽天的ともいえる信頼がある．神秘の仕掛けが施されてはいるが，人間が組織する結社，共同体に帰属する充足の感覚がある.

3

『魔笛』に倣って，『第２部』では２幕の台本の構想をゲーテは遺しているが，1802年ブレーメンのフリートリッヒ・ヴィルマン（Friedrich Wilman）社『1802年度年鑑―愛と友情に捧ぐ(*Taschenbuch auf das Jahr 1802. Der Liebe und Freundschaft gewidmet*)』に途中までを『魔笛第２部　戯曲的メールヒェンの草稿』(*Der Zauberflöte zweiter Teil von v. Goethe. Entwurf zu einem dramatischen Märchen.*）として発表して後，現在作品として遺されているのは，構想の２幕の初めの部分まで，1808年にコッタ版に「断片」として収録されたものである.

ゲーテはシカネーダー版の登場人物，舞台装置をそのまま引き継いで物語を進行させる．夜の女王の手下であったモノスタートスには明白な悪の意志が与えられている．登場時の夜の女王のアリアの不吉さが戯曲全体を支配する．

雲よ沸き立って，／地上を覆え，
なお暗い，闇になるように！
恐れと戦き／嘆きと悲しみは／怯えかき消えよ
沈黙と死は／夜の歌声を終わらせよ（MA Bd.6·1 S.102）

タミーノとパミーナの生後間もない息子をモノスタートスが奪い取り，黄金の棺に封じ込め，「星の定めた」闘いを挑む．神託によってザラストロはさらなる試練へと教団から旅立ち，「ある予言」に従って黄金の棺が太陽の祭壇に供えられると，地震が起きて棺は地の底に沈む．ザラストロの神通力で3人の子を得たパパゲーノ夫妻に魔笛は委ねられ，辛うじて彼らがタミーノとパミーナを勇気づけ覚醒させている．タミーノとパミーナが再び火と水の試練を克服すると，強烈な光とともに，息子は精霊（Genius）となって飛び立つ．そこで『断片』は終わるのだが，構想の上では精霊を巡る闘いがさらに続き，神殿が破壊され，舞台は夜の世界のままである．

『魔笛』で表された「死」は通過儀礼の象徴であり，人間の理性の勝利を歌っていた．では第2部で持ち出された「棺」，ゲーテが書き加えた，さらなる「死」は何を意味するのか．万物の連関を表す錬金術的なシンボル，自らの尾に咬みつく蛇オウロボロスの「死」によって，生と死の世界が宥和し，ユートピアを獲得するメールヒェンを同じ年にゲーテは書いているが，『第2部』構想にも，『魔笛』に出てきたオシリスとイシス，すなわち「地下の死者の国からの蘇りと豊饒のシンボル――エジプトの死者の国のイメージは，その古さ自体の魅力もあって，何度もヨーロッパ人の死の風景の中に喚起された．オカルティズムとよばれるような秘教の伝統には必ずといってよいほど，エジプトから続くという伝統が引き合いに出される」[9] エジプトの神への礼賛がある．カバラに起源が

あるタロットの「死」は，移行を表わす13番の大アルカナであり「夜の娘」「眠りの妹」，これはどちらも物事の刷新と再生の力を持っている．『第２部』ではパミーナとタミーノは子供を奪われてから，周期的な眠りに襲われるが，ゲーテは，„Heilschlaf“の手法を他にもファウスト第一部，イフィゲーニエなど，作品の中で用いている．さらに新プラトン派に影響を与えたディオニュソスの復活神話，そして，スウェーデンボルク[10](Emanuel Swedenborg)の地上の記憶と人格を持った，永遠に連続する生と接続した「死」，しかも社会性を備えた，„Organisation“の過程としての「死」のイメージである．『第２部』では，『魔笛』にあったような，たとえばパパゲーノのルソーの自然児を思わせるような，個々の持つあざやかな生彩は消え，(ゲーテはそれを作曲家の力量に委ねようとした)，絶大な価値を持っていたザラストロへの礼賛もない．登場人物と舞台の仕掛け全体が生み出すひとつの世界が強調されている．パミーナとタミーノから生まれた，形姿を持たない精霊は，完成された小宇宙としての人間の霊であり，さらにここから最高善に向かって永遠の生を繰り返すのである．この精霊はよく『ファウスト』のオイフォリオンの先駆けと説明されるのだが，その持つ意味はより大きいと言えよう．

4

フィヒテ（Johann Gottlieb Fichte）の「フリーメーソンは人間として生まれ，自らの身分の教養や国家さらにはその他の社会的関係を通り抜けていくが，こうした地盤の上で徹底して再び人間へと形成されなければならない」[11]といった倫理や行動による「形成」（Bildung）を目指す理念との一方に，神秘性や非合理的性への欲求が強くドイツにはあった．

1783年10月プレッシング(Friedrich Victor Leberecht Plessing)（カントの学生．ヴェルターに熱狂した青年の一人であり，ゲーテとも面識がある）はカントに「狂信と無知の悲しい時代」が来る，と書き，「狂信と迷信によって思想の自由を抑圧するものとして「ジェスイット」「黄金薔薇十字団」「プロテスタント系結社」の名を挙げる[12]．

ゲーテ自身この時代をふりかえって「当時は秘密結社の時代だった」と言っている．18世紀末のドイツには，ゲーテがそのメンバーであった

フリーメーソン，イルミナーテンオルデンの他，黄金薔薇十字団，ジェスイット，プロテスタント系結社がことに影響力を持ち，数多くの秘密結社が存在していた．この秘密結社流行の背景には，一見矛盾するように見えるが，どちらも「メーソン的」な二つの面があった．一つは神秘主義への関心であり，一つは社交上，あるいは政治上の結社の存在理由である．これらはゲーテが秘密結社に関与する動機でもあった．

ゲーテ自身にも，この両極の一方，啓蒙の光が照らさぬ，闇のような神秘に惹かれる傾向がある．ただしゲーテにあっては，神秘的なものの獲得は，ニュートン (Isaac Newton) と同様に，まず自然科学研究の方向へと向けられ，ゲーテはそこで絶対的存在の啓示に導かれた秩序，生命の生成と永続する発展という理念に出会う．植物という地上の生命活動にその根源の存在を見ようと試み，その器官，オルガンの連関作用と有機的構成，組織化を「高昇」(Steigerung) という概念で表現した．

ゲーテと神秘主義との出会いはヴァイマールよりはるか以前，1769年，病を得てライプチヒから帰郷した時の，母の友人で，マイスターの「美しき魂」のモデルとして知られる，ズザンナ・カタリナ・フォン・クレッテンベルク (Susanna Katharina von Klettenberg) との親交に始まる．敬虔主義者たちとの出会い，ユダヤ神秘主義，ヘルモント (Johann Baptist Helmont)，パラツェルズス (Theophrastus Paracelsus)，ヤーコプ・ベーメ (Jakob Böhme)，ヴェリング (Georg von Welling) の秘教を伴った新プラトン主義の描いた表象が浸透していたその頃に，彼も神秘主義者たちへの知識を得ていた．ベーメの信奉者で17世紀のプロテスタント神学者アルノルト (Gottfried Arnold) の『非党派的な教会及び異端の歴史 (1699-1700)』(*Unparteiische Kirchen- und Ketzer-geschichte*)[13]によって，ゲーテは「私もまた自分の宗教を築きうることを当然と思い，ごく気楽にこの試みをしてみた．新プラトン主義を根底に据え，これに，古代密儀的なもの，神秘的なもの，ユダヤ秘教的なものを加え，ひどく異様に見えるひとつの世界を築き上げた．」(『詩と真実』HA.Bd:9.1988,S.350.) という．その後クルト・ホーホフ (Curt Hohoff)[14]によれば，ゲーテは『詩と真実』では言及していない，しかし父の蔵書に，そして後のヴァイマールの蔵書に入っていた，2人の著者

の書いたものを読んでいる．アルノルトの弟子で，敬虔な「自由思想家」(Frei- Geist)であり，聖書とキリスト教的魔術の名で，不活発な教会や合理的哲学，唯物論者らの「くだらぬ物理」に激しく抗議したデイッペル（Johann Conrad Dippel)，シュヴァーベン敬虔主義者，神秘主義者で錬金術師，エーティンガー（Friedrich Christoph Oetinger)である．

そしてファウスト昇天の場面にそのイメージが想起される神智学者，当時のスタイルの万能学者スウェーデンボルクもその蔵書には含まれていた．世界の創造者であり救済者である神の姿に啓示をうけ，ダンテ風のファンタジーで神の国，天国や地獄の報告をしたこの人物にエーティンガーは共感し，ラテン語からドイツ語に翻訳して，シュヴァーベン敬虔主義者達にその神智学を知らせたといわれる．また，ゲーテが特に気に入っていたという蝶の変態についてなど，ゲーテが詩的に表現したのと同じように生きものの生成を歌っている．この人物をヘルダー（Johann Gottfried Herder)は，ライプニッツ(Gottfried Wilhelm Leibniz)，ニュートン，モンテスキュー(Charles de Secondat Montesquieu)，ツィンツェンドルフ(Nikolaus Ludwig Graf von Zinzendorf）に比肩させ，これらの人々を天の神の国と地の建築士（Baumeister）と呼んでいる．『フランクフルト学報』(*Frankfurter Gelehrte Anzeige*)でゲーテはスウェーデンボルクを熱狂的なほどに讃えている．「我々の時代の価値ある視霊者，天の歓喜に取り巻かれ，すべての感覚と四肢で以て，霊に語りかけた，その胸に天使たちが棲む・・・」(WA.Abth. I 37,S.261)

スウェーデンボルクは，1688年プロテスタントが支配するストックホルムに生まれたが，彼が通った教会には破壊を免れたカトリック的な聖像・絵画といった装飾品が残っていて，視覚的なイメージを与えられたという．裕福な家庭（父はスウェーデン国教会の司教）に生まれてイギリス，フランスで学びヨーロッパ中を旅行，数学，物理学，天文学，地質学，鉱物学，心理学，医学など科学研究全般に渡って150もの論文を発表し，鉱山局の監査官を務め，やがて『天界の秘儀』8巻を含む霊視(Geistersehen)に基いた著作を16巻，聖書解釈に関する数点の著作(『証明された神の言葉』8巻など)，5巻の『霊的日記』を著わしている．この人物の著作が哲学者や著述家，芸術家に大きく影響を表わすのは19世

紀になってからとされているが，カントはその初期に強く関心を持ち，1766年の『形而上学の夢によって解かれた視霊者の夢．病人の夢のように，偽りの形が心に描かれる．ホラティウス(*Träume eines Geistersehers, erläutert durch Träume der Metaphysik. velut aegri somnia, vanae Finguntur species. Hor.*)』の中でその霊の存在の認識に取り組んだ．距離を置きながらも，当時跳梁跋扈していた多くの「妖術師」(Geisterseher)とは異なったものだとしたうえで，「超越者への敬虔な信仰」からそれを人間の理性の限界，経験認識の可能な範囲を超えたものだとして，副題に見られるように病理的判断の可能性に委ね，判断を留保した[15]．ラヴァーター (Johann Kaspar Lavater)もまた霊界への関心を強く持ち，『永遠界への展望』(*Aussichten in die Ewigkeit in Briefen an J. G. Zimmerman*) [16]で，身体を持ち，形ある物の世界に棲み，物質的な感覚的な事物を扱い，一つかそれ以上の社会を形成する」と書き，スウェーデンボルクの著作を読んでいた，接触しようとしていたが，カントの判断を考慮してか，それについて言及を避けたという．

スウェーデンボルクによれば，地上の生とあの世の生には連続性があり，地上的な人格・性格・性・制度・感受性は霊において持続し，霊はそれぞれのレヴェルで，例えば教育というような交互作用を持ち，さらに成長し，成熟し，共同体を形成し，天界と地獄と中間の世界も，その住人もそれぞれの役割をもって有機的に照応しあう„Organisation“としての小宇宙だという．道徳律と意志の一致を目指して，人格を持った霊が，死後もなお無限に至高の善である神に向かって進歩し続けるというこの「天国のヴィジョン」は，永遠に成長し，高みに上昇していくファウストの天国のヴィジョンを想起させる．「観る」ことと「獲得する」ことの同義性はゲーテには受け入れ易かったと思われる．

この「死」は「ヴェルター」の中でも死んで「無」になることを恐れるロッテに，

「ぼくたちはまた会える．この世界でもあの世界でも，また会える」
また，母親の霊があなたを離れることはない，といい，

「ぼくたちはまた会うでしょう」とぼくは叫んだ.
「ぼくたちは見つけあうでしょう. どんな姿でもお互いがわかるでしょう. ぼくは行きます」言い続けた.
「すすんでお別れします. でも, 永久にというのなら, とてもぼくには耐えられない. ご機嫌よう, ロッテ, ご機嫌よう, アルベルト. ぼくたちは, また会います」(MA.Bd.1-2 1987,S.245f.)

という地上の記憶を備えた生の連続を信じるヴェルターの考えにも現れていた. また, この度重なる宣言は, ロッテへの情熱だけではなく, 虚無を意味する永遠の死への恐れでもあった.

ディッペル, エーティンガー, スウェーデンボルクについてゲーテが『詩と真実』の中で触れなかったことを, ホーホフは, これをロマン主義の時代に書いたため, 魔術と青年時代のキリスト教的敬虔さの密接な結びつきを明るみに出したくなかったのだと説明している[17]. 多くの狂信や反動が生み出される中で, カントのように, 理性の限界を越えて超自然的なものを志向することを, 妄想信仰 (Wahnglauben) として退けようとする考え を, ゲーテもむろん念頭に置いていた. 1805年に, *„Tagund Jahreshefte“* でスウェーデンボルクの名前を出してはいるが, その透視能力について少し触れているだけである.

シュタイガーのいうゲーテとモーツァルトの芸術的精神の親近性,「際立った社会的・公共的な特徴, すなわち, 個人が新しい自己を得たと感じたときに同時に持つ, 自分が周辺世界に結び付けられているという感情, 心の深みから流れ出て, 信頼と希望に満ちて全人類に注がれる善意」人間の感情と, 神の定めた秩序の永遠の明白さの合一[18]を魔笛から受け取ったゲーテは, 死を通過して永遠の連関を結ぶ„Organisierung“という概念 をさらに人間教育と社会の問題に発展させていく.

„Organisation“という言葉を, ゲーテは人間の体に, 体質というような意味で使っている.「繊細(zart)な„Organisation“を持った人は, そのおかげで希有の感受性にも恵まれるし, 天の声も聞き取れる. ただそういう体質は世間や自然との間にもつれを起こすと簡単にかき乱されたり,

傷つけられたりしやすい・・・(20.12.1829 Gespräch mit Eckermann)」ゲーテにあっては，個人と共同体との関連は„Organisierung“という概念で有機的に把握されていた．「塔の結社」の目的は，ヴァイスハウプト（Adam Weishaupt）の構想したような秘密の世界支配術のシステムではなく，一人の人間の完成[19]，道徳的完成であるべきだった．しかしまるで神々であるかのように，運命であるかのように「塔の結社」が背後で個人をその意志とは無関係に操り，支配力を行使する不気味さをシラーは皮肉をこめて„Maschienerie“と呼んだのである[20]．

5

Goethe-Jahrbuch1994年の„[...] *die Vorteile meiner Aufnahme“, Goethes Beitrittserklärung zum Illminatenorden in einem ehemaligen Geheimarchiv in Moskow* という報告の中に，「政治的関わり」が説明されている[21]．

ゲーテは1780年２月18日，ヴァイマールのロッジ，「アマーリア」の親方（Meister von Stuhl），ヤーコプ・フリートリッヒ・フォン・フリッチュ（Jacob Fridrich von Fritsch）へ，尊敬する人々とより近しく交渉を持ちたいという「社交上の思い」のみから入会の許可を願う，と書いている(WA.IV,4,S.175)．入会は同1780年６月23日のことであった．むろん，もとより身分・宗教・思想の差異を超えたネットワーク形成がフリーメーソンの目的であり，多くの人にとっての入会の動機となってはいた．本来，秘密結社には社交クラブの要素があり，結社の思想に関わらず，カントやゲーテといった高名な人物や貴人を歓迎するロッジも存在した．しかし1780年から1785年にかけての，フリーメーソンそしてイルミナーテンとしてのゲーテの活動期は，バイエルン王位継承戦争後の苦境の時期であり，枢密顧問官就任後でカール・アウグスト公から政治的に密接な信頼を寄せられていたゲーテの政治的活動期であって，ゲーテが挙げたこの社交上の理由は，個人的交流どころか，きわめて政治的目的にかなったものだった，と指摘されている．これは諸侯同盟を巡る準備の時期であり，アウグスト・フリートリッヒ・カール・ヴィルヘルム(August Friedrich Karl Wilhelm）とゲオルク一世・フリートリッ

ヒ・フォン・ザクセン—マイニンゲン（Georg I. Friedrich von Sachsen-Meiningen）はロッジ„Charlotte zu den drei Nelken"のメンバー，エルンスト二世・ルートヴィヒ・フォン・ザクセン—ゴータ（Ernst II. Ludwig von Sachsen-Gotha）もフリーメーソンであり，後には北ドイツのイルミナーテンであった．

拡がり続ける神秘主義の中にフリーメーソンの教義が溶け込んでいこうとしている——つまり多くの狂信や，妄想を生み出した——時期であるがゆえに，却ってこういった実際的な利益が結社への入会の動機となることはありうる，あるいは動機として掲げうる，ということであろう．

またケンパーによれば，激しい傾向闘争の，またフリーメーソンの始原の儀礼と教義へのグロテスクな服従によって，一部は中世のテンプル騎士団へ，一部はなお古い薔薇十字団へと回帰させられつつある危機的な局面にあったフリーメーソンに，ゲーテはそれを知りながら入会しているのであり，ロッジ「アマーリア」の活動は麻痺していたということである．カール・アウグスト公はラヴァーターに，「ゲーテはたしかにフリーメーソンではあるが，彼はこの教義（Wissenschaft）には医学や数学よりも近い関係にはない，と私は思っている」[22]と書き送っている．1782年ヴィルヘルムスバートのフリーメーソン会議で，神秘主義的な方向が勝利すると，イルミナーテンは諸侯同盟のプロジェクトのために適切な補償の綱領を提供し，カール・アウグスト公，ゲーテ，さらにフリッチュもイルミナーテンに入会している．プロイセンの王位継承者フリートリッヒ・ヴィルヘルムのイルミナーテン勧誘に失敗して1785年，教団の活動を辞め，それ以後，特にフランス革命以降にはむしろあらゆる秘密結社に対して抑圧的な政策へと移行していく．

迷信や妄想信仰に深入りしていくフリーメーソンの結社と，啓示をその名に掲げながらセクト意識の強いイルミナーテンへの関与のしかたからは，ゲーテの，ロッジの精神そのものへの関心は，1784年の詩『秘儀』（*Die Geheimnisse*）を手がかりにしても読み取りがたく思われる．

しかし，そういった秘密結社の存在から理解しうるのは，現代では矛盾するものである理性・合理性，自然科学的な要素と，不合理で神秘的・秘教的な錬金術やカバラといった要素が，18世紀後半のドイツの精神の

中では，分裂することなく，一本の線上の両極として存在するということである．『魔笛』の中の光と闇のイメージのように．ゲーテにとって結社への参加の主眼は政治上の功利的な目的であったということは，政治的人間ゲーテの側面を表して，頷けないことではない．

『第2部』の完成と上演を，ゲーテは後年にもまだ諦めていなかったといわれる．ドイツの観客を信用しなかったゲーテが，オペラ魔笛を自分のものにしたかったのだ．シラーがこれを断念するようにと勧めたのは，両者のモーツァルトへの愛着の度合いの違いだけではなく，18世紀終末のドイツ社会と，ゲーテの持つ一切のメーソン的なもの，その政治性をも含めてが，シラーにとって厭わしいものだったのだといえよう．

テクスト

モーツァルト魔笛：Text von Emanuel Schikaneder : Bärenreiter Verlag, Kassel 1970.

ゲーテのテキストからの引用は下記の省略記号と巻，ページ数を本文中に示した．

MA＝*Sämtliche Werke.* Münchner Ausgabe.

WA＝*Goethes Werke.* Weimarer Ausgabe. 1896.

HA＝*Goethes Werke.* Hamburger Ausgabe. 8.Aufl. 1982.

注

1 MA. Bd.6･1 S.913f.

2 クルト・ホノルカ『「魔笛」とウィーン』西原稔訳 1991年 平凡社 255ページ．

3 MA. a. a. O. S. 860.

4 Staiger, Emil: Goethe und Mozart. In: Musik und Dichtung. Zürich 1947, S.14.

5 MA. a.a.O. S. 915.

6 MA. a.a.O. S. 915.

7 Fink, Gonthier-Louis : *„Das Märchen", Goethes Auseinandersetzung mit seiner Zeit*. In: *Goethe-Jahrbuch.* Bd.33, Weimar 1971, S.109.

8 Wieland, Christoph Martin : *Gesammelte Schriften*. 1. Abt., 20. Hildesheim 1987, S. 375.

9　竹下節子『ヨーロッパの死者の書』1995年　ちくま新書　67ページ.

10　スウェーデンボルクについての書物は多数出版されているが，18世紀ドイツにおける影響については：Michael Heinrich : *Emanuel Swedenborg in Deutschland.* Frankfurt 1979.

11　Flinter, Wilhelm(Hrsg.) : *G. Fichte Philosophie der Maurerei.* Leipzig, 1923, S. 18.

12　*Kants gesammelte Schriften,* hrsg. von der Königlich-Preußischen Akademie der Wissenschaften, Bd.10. Berlin 1902, S. 371f.

13　正確な書名は: *Gottfried Arnolds Unparteyische Kirchen- und Ketzer-Historie von Anfang des Neuen Testaments bis auf das Jahr Christi 1688.* Vgl. Brinkmann, Richard : *Wirklichkeiten. Essays zur Literatur. Tübingen 1982, S. 94.*

14　*Hohoff, Curt : Johann Wolfgang von Goethe. Dichtung und Leben.* München 1989, S. 190f.

15　Kant, Immanuel : *Träume eines Geistersehers, erläutert durch Träume der Metaphysik.* Reclam Stuttgart 1976.

16　Lavater, Kaspar Johann : *Aussichten in die Ewigkeit in Briefen an J. G. Zimmermann,* 2. Aufl. Hamburg 1773.

17　Hohoff, Curt : a. a. O. S. 267.

18　Staiger, Emil : a. a. O. S. 18

19　Wilson, W. Daniel : *Geheimräte gegen Geheimbünde, ein unbekanntes Kapitel der klassisch-romantischen Geschichte Weimars.* Stuttgart 1991, S. 161.

20　Brief an Goethe, 8. 7. 1796. *Goethe Werke.* Hamburger Ausgabe Bd. 7. 10. Aufl. S. 640.

21　Kemper, Dirk:„[...] *die Vorteile meiner Aufname", Goethes Beitrittserklärung zum Illminatenorden in einem ehemaligen Geheimarchiv in Moskow.* In : *Goethe-Jahrbuch* Bd.111, Weimar 1994, S. 316.

22　Ibid., S. 318.

参考文献

田村一郎『18世紀ドイツ思想と「秘儀結社」』(上) 1994年　多賀出版

吉村正和『フリーメイソン』1989年　講談社

ジャック・シャイエ『魔笛　秘教オペラ』高橋英郎・藤井康生訳 1976年　白水社

„*Der Zauberflöte Zweiter Teil*“ und der Tod

Yuri FUJISAWA

Im 18. Jahrhundert gab es in Deutschland den Rationalismus als ein Produkt der Aufklärung und paradoxerweise auch den Irrationalismus und den Mystizismus. Es war auch das Zeitalter der Geheimgesellschaften: Freimaurerei, Illuminatenorden, Rosenkreuzer, Jesuitenorden und protestantische Orden hatten großen Einfluß.

Johann Wolfgang von Goethe war Freimaurer und später Illuminat. Die Turmgesellschaft in „*Wilhelm Meisters Lehrjahren*“ ist als eine Darstellung seiner freimaurerischen Idee angesehen worden. „*Die Zauberflöte*“ von Wolfgang Amadeus Mozart ist auch ein freimaurerisches Meisterwerk. Goethe zeigte für diese Oper lebhafte Sympathien und versuchte, einen zweiten Teil zu schreiben.

Mit dem Schlüsselwort „masonisch“ finden wir bei Goethe zwei widersprüchliche Seiten von Goethe: Neigung zum Mystizismus aus seiner Jugendzeit, und andererseits politische Aktivität.

Dirk Kemper erklärt, die Epoche seiner Tätigkeit als Freimaurer und Illuminat falle in die Vorbereitungszeit für den Fürstenbund (1785). Für Goethe waren politische Interessen viel wichtiger als die Beschäftigung mit der freimaurerischen Wissenschaft. Der Zweck der Turmgesellschaft ist nicht das System einer geheimen Welt und Regierungskunst, sondern die Ausbildung eines Individuums. Die Konzeption der Turmgesellschaft wurde geplant, als er schon der Geheimgesellschaft—er hatte sie bereits verlassen — kritisch gegenüberstand.

Für die „*Zauberflöte*“ und den „*Zweiten Teil*“ charakteristisch sind

wiederholte Äußerungen im übertragenen Sinn zur Vorstellung vom Tod. Der Tod in der *„Zauberflöte“* bedeutete die Initiation in der freimauererischen Loge. Damit wird man in die Loge aufgenommen und Ausbildung und geistliche Wiedergeburt werden vollendet. Goethe schuf im *„Zweiten Tell“* eine neue Figur : *„Genius“*, das Kind von Pamina und Tamino, und mit dem Requisit eines goldenen Sargs fügte er dem Tod im *„Zweiten Teil“* esoterische Vorstellungen hinzu, Osiris und Isis, die ägyptischen esoterischen Symbole der Wiedergeburt : der Tod des kabbalistischen Tarocks, der die Erneuerung und den Übergang bedeutet; der Heilschlaf, den wir auch in *„Faust Erster Teil“* und *„Iphigenie“* finden, und die Vorstellungen des Todes vom Universalgelehrten und Geisterseher seiner Zeit, Emanuel Swedenborg, dessen Schriften in der Bibliothek seines Vaters und später in Weimar standen. Swedenborg vermittelte die Vision des Himmels mit einer dantesken Phantasie : die Geister behalten das Gedächtnis dieser Welt, bilden die Gesellschaft, wirken aufeinander ein und reifen weiterhin heran, wie in der Schlußszene in *„Faust“*.

Diese Vorstellung von jener Welt kann man auch in *„Werther“* sehen:„ ... wir werden uns wiedersehn! Hier und dort wiedersehn! “... wir werden uns finden, unter allen Gestalten werden wir uns erkennen. „ So hielt Goethe mystisch und esoterisch den Tod für ein Schwellen-Überschreiten und glaubte an die Dauer des Lebens.

In *„Dichtung und Wahrheit“* erwähnte er weder Swedenborg noch andere Hermetiker. Curt Hohof schreibt, wahrscheinlich habe Goethe, da er das Buch in der Zeit der Romantik schrieb, den engen Zusammenhang zwischen der Magie und der christlichen Frömmigkeit seiner Jugend—oder die esoterischen und pseudoreligiösen Elemente der Zeit des „Wahnglaubens“ —nicht aufdecken wollen.

Friedrich von Schiller riet ihm, die Fortsetzung der Oper aufzugeben. Es ist denkbar, daß Schiller die beiden *„masonischen“* Seiten Goethes, ob mystisch oder politisch, unbehaglich waren.